文化

食で楽しむ名画の味わい十選（7）

キュレーター 林 綾野

©Fondation Foujita/ADAGP,Paris &JASPAR,Tokyo,2018 G1267

藤田嗣治「自画像」

今しがた食事を終えたばかりなのだろう。懐に愛猫を抱き、くわえ煙草で寛ぐ画家の姿。藤田嗣治、50歳の自画像である。

27歳でパリに渡った彼は、人生の大半を海外で過ごすが、1933年から5年ほど日本に暮らした。この絵では、四ツ谷の借家で過ごす自らを描いている。畳に藍染めの暖簾という和の空間に、角火鉢や裁縫箱。卓袱台には空のお椀や茶碗、醤油瓶に焼き魚、枝豆と里芋、キュウリの食べ残しが雑多に並んでいる。

藤田はセルフプロデュースに長けた画家だった。おかっぱ頭に丸眼鏡、ちょび髭を蓄えるエキゾチックな彼の自画像はパリで好評を博した。この絵にも、恰も外国人のように日本風情を楽しむ自らをこれ見よがしに描いたのではないか。

翌年、麹町に純日本風の家を建てたことを考えれば、この時期、藤田は本気で日本趣味に走っていたのだろう。一つ気になるのは、自ら料理もし、時に食への強い執着を見せた彼に限って、こんな風に食べ残すだろうか、ということだ。好物を絵に示したのか？ 単に絵作りのための演出なのか？ 計り知れない画家の思惑に振り回される。しかしそれこそが、絵を見る楽しみでもある。（1936年、油彩、カンバス、127・7×191・9センチ、公益財団法人平野政吉美術財団蔵）

映画作り主役は世界の子

◇仏教育プログラム、14カ国1000人が発表・語り合う◇

ナタリー・ブルジョワ

世界各地の子供たちが映画のプロと共に、自分たちで短編映画を作る。できた作品をパリに持ち寄り、発表する――。

フランスの映画アーカイブ、シネマテーク・フランセーズの映画教育プログラム「映画、100歳の青春」（CCAJ）を立ち上げて、23年になる。今年度も14カ国、43のワークショップの約1000人が参加。それぞれの映画を作っている。

CCAJが始まったのは1995年。リュミエール兄弟が映画を発明して1世紀を迎えた年だが、観客の減少から「映画の死」がささやかれていたころだ。フランスでは国家が主導し、小学校、中学校、高校での映画教育も始まっていた。

○○○ 鑑賞と創作を結ぶ

国の映画教育プログラムは多数の学校への普及が前提なのに対し、私たちは少数を対象に、鑑賞と創作を結び、実践を中心とした実験的なワークショップを目指した。現場の教師や映画人が個々の経験を共有したいという思いから生まれたプログラムだ。活用した資料やワークショップの内容にはインターネットで誰でもアクセスできる。映画批評家のアラン・ベルガラが芸術顧問となり、シネマテーク理事長で映画監督のコスタ・ガブラスが力強く擁護した。

教え方はこうだ。1学年度を通して、子供たちは年間テーマに即した映画の抜粋を見る。今年度のテーマは「場所と物語」。アルフレッド・ヒッチコック「レベッカ」、レオ・マッケリー「めぐり逢い」などの名作を見て、映画における「場所」について考える。

同時に共通のルールに沿って子供たちは監督や編集者らプロの支援を受けながら、小さな映画を作る。自分で脚本を書き、撮影し、編集する。大人は付き添うが、とって代わらない。これが一番大切だ。個人の習作を経て、最終的に1本の共同作品（10分）を制作する。

ブラジル・リオデジャネイロのワークショップ

○○○ 今年度は日本も参加

シネマテークでの発表会では、映画を作った子供たちが会場から質問を受ける。小さな子供も手を挙げる。子供たちは他国語を耳にして驚く。

子供たちは自分の言葉で自分の映画を語る。これが自分たちの生活であり、場所だと説明する。そして映画について真摯に語る。毎回非常に心を揺さぶられる瞬間だ。

ワークショップの対象は6～20歳。参加する映画人と教師とコーディネーターはまず9月にパリに集まり、ベルガラの講義を受け、年間テーマに即したルールを皆で一緒に決める。3月に中間報告をし、それぞれの教育経験を共有する。6月の発表会には大人も子供も全員が集まる。

当初はフランス本国、続いて海外県で展開していたが、興味をもった隣国の人々に声をかけられ欧州へ範囲を拡大。さらにブラジル、インド、キューバ、メキシコ、アルゼンチンなど世界規模に発展した。今年度は日本が「こども映画教室」（土肥悦子代表）を通して初めて合流、中学生9人が諏訪敦彦監督の指揮のもとに横浜でのワークショップに参加している。

○○○ 常に新しいエネルギー

CCAJが発展したのは一人一人が模索してきたからだ。教師、映画人、生徒が同じ目的のために、自分の能力を発揮する。すべては仮定から始まり、大人も子供も新しいテーマにどう取り組むか、何がみつかるか、わからないまま探す。知識の押し付けではなく、成長を促す。自力で学び、経験と知識を蓄える。

私も若い頃、映画とどう関わるかを模索していた。学業の傍ら、記録係や衣装係として撮影現場を知り、配給会社で働いた。シネマテークでも最初はフィルム収集部門にいた。当時のドミニク・パイーニ館長から教育部門創設のチャンスを与えられ、すぐにCCAJという冒険的企画に身を投じた。映画について考え、実践する場所を他の人たちと共有したかった。

CCAJは新陳代謝している。子供は皆違うし、ワークショップも一つ一つ違う。テーマも、参加国も、毎年変わる。だから常に新しいエネルギーがもたらされる。日本のワークショップでは非常に刺激的で独創的なアプローチを発見した。また新しい波が立つに違いない。（シネマテーク・フランセーズ教育担当）

文化往来

美術品に「追及権」、日本でも導入提唱

絵画など美術品の転売時に転売価格の一部を作家に還元する「追及権」を日本でも導入しようと、著作権管理団体が動き始めた。転売価格の一定率が作家の所得になり、著作権が存続する間は適用される仕組みだ。19世紀の画家ミレーの「晩鐘」が、死後に高値で取引された一方で、遺族が極貧の生活を余儀なくされたのを機に提唱された。

2001年に欧州連合（EU）が指令を出し、英国（06年）やスイス（16年）など欧州中心に導入が進んだ。現在までに80カ国以上で認められている。英国では追及権が導入されても美術品の市場に大きな影響はなかったという。

日本ではこれまで一部の作家らが導入を呼びかけていたが、議論は深まっていない。文化庁は具体的な検討はしておらず、オークション業者も消極的だ。

このほど来日した著作権協会国際連合（CISAC）のガディ・オロン事務局長は、日本美術著作権協会（JASPAR）などと共同で記者会見し「追及権は複製が難しい美術品の分野で、作家の生活を支える重要な収入源になる」と説明した。作家の母国と、売買された国の両方で認められていなければ追及権は享受できないため、美術品の市場が大きい日本や米国、中国での早期導入を目指す。

私の履歴書

モフタル・リアディ ⑦

闘争

1945年8月15日、日本は連合国に無条件降伏した。

私の住むマランでは中学校が復活し、私は中学に進んだ。父は日本軍から釈放されて帰ってきた。だが父はずっと何かにおびえていた。オートバイの音が聞こえると、その場から逃げ出した。日本軍に拘束された、そのときにバイクの音が響いていたからだ。

私は父をシンガポールに連れていき、しばらく滞在した。環境が変わると、父の恐怖心も和らいでいった。

日本の降伏後、独立運動の指導者スカルノが8月17日、インドネシア共和国の独立を宣言したが、オランダは独立を認めようとしなかった。まず日本軍の武装解除を目的に英国軍がスラバヤなどに上陸し、次いで失地回復を狙うオランダ軍がインドネシア各地に上陸してきた。

独立軍ゲリラ部隊支援

拘束されるも釈放、中国へ

これに反発するインドネシア住民が決起し、英軍やオランダ軍との戦闘が始まった。インドネシア共和国側はスラバヤからマランにかけての山間部でゲリラ戦を展開した。

私は小学校時代の恩師の影響を受け、植民地こそが人類の平等を破壊し、貧富の差を生み出す元凶と考えていた。血気盛んな年ごろでもあり、インドネシア独立軍のゲリラ部隊への支援を開始した。

マラン一帯のゲリラを率いていたのはイマム・スカルトという30代の人物だった。私とは年の差が大きかったが、意気投合した。私はスラバヤで薬品を購入し、山中にいるゲリラ部隊まで運んだ。オランダ軍の位置情報もスカルトの部隊に報告した。

オランダはインドネシアに傀儡国家をつくる分断工作に出た。後に共和国側でも閣僚にもなった華人の蕭玉燦（シャウ・ギョクチャン）が華人華僑の学生に対し、反オランダのデモを呼びかけた。

旧世代の華人華僑は政治から遠ざかって暮らしてきたが、インドネシアで生まれた若い世代は違っていた。反オランダの学生運動に多くの華人華僑が集まった。私もすぐさま運動に参加した。

オランダ側は運動に参加した学生を逮捕し、マランの監獄へと送り込んだ。私も指名手配されて捕まったが、すぐに釈放された。オランダ側が私を指名手配の学生と異なる人物だと思ったようだった。

日本の降伏後、中学校の授業が再開（後列左から2人目が筆者）

私の中国名である李文正（北京音、リー・ウェンチョン）という学生を指名手配していたのだが、私の身分証には「リモディ」と記載されていた。出生届の際に、父の故郷である福建省興化地方（今の莆田市）の方言を使っていたからだ。方言を聞いたオランダ人係官がその発音に近いリモディという名前を記したのだった。私のインドネシア名がリアディなのはこのリモディに由来している。

私は危ういところで難を逃れたが、インドネシアにいれば再び捕まる恐れがある。スラバヤにいる大叔父（正確には祖父のいとこ）が興化地方の出身者で上海に住む商人を紹介してくれた。彼を頼って上海に向かった。46年末頃と思う。さらにこの商人が南京の国民党政府で要職にあった呉鶴雲という将軍に引き合わせてくれた。

呉将軍も興化地方の出身だ。

将軍の取り計らいで当時、南京にあった国立中央大学の入学試験に臨んだ。専攻は中国哲学を選んだ。他学部より競争が激しくなかったからだ。無事に合格し、南京での学生生活が始まった。

（リッポーグループ創業者）

交遊抄

本当の価値とは

千葉 勝美

もう四半世紀前になるが、最高裁判事を補佐する調査官だった頃、段ボール1箱分のワインをもらったことがある。贈り主は7年先輩の裁判官で東京高裁にいた伊藤瑩子さん。過去の判例を探していた伊藤さんに資料を差し上げたら、ご自身が気に入った10本ほどのワインをお礼にいただいた。

高級銘柄ではないがどれもおいしく、2週間余りで全部飲みきって感想を伝えたところ、伊藤さんは喜んだ。裁判所で一度も同じ職場となることはなかったものの、互いの知人を交えて年に数回、一緒にワインを飲むようになり、今も交流が続く。

行きつけの店の名前から「ラ・ポストの会」と名付けた会のメンバーは次第に増え、現在は計6人。伊藤さんが見つけてきたワインを飲むと、酸味が強すぎると思われたワインも蜂蜜を使った料理にはピッタリ合うなど、本当の価値を見極めることの大切さにいつも気付かされる。

2016年に最高裁判事を退官し、企業法務に関わる弁護士となった際、伊藤さんが私に「裁判官として培ったことを忘れないで」と声をかけてくれた。見掛けに惑わされず本質を見極めるという裁判官の信条は、ワインを通じて伊藤さんが教えてくれたことでもある。次はワインを飲みながらどんな話ができるか、今から楽しみだ。（ちば・かつみ＝弁護士・元最高裁判事）